

多様化する  
国際○○学部・学科  
その選択のポイントとは？

# 世界で活躍するための “国際”系学部進学ガイド

国際教養、国際コミュニケーション、国際関係など、ここ10年ほどの間に急増している“国際”系の学部・学科。その増加の背景にある“グローバル人材”へのニーズと、“国際”系学部・学科における教育の特色、そしてこれらの大学を選ぶポイントについて解説する。

取材・文／伊藤敬太郎

## グローバル人材に求められる力は 語学力だけにとどまらない

ビジネスの現場でも教育の領域でも、“グローバル化”へのシフトは強力な加速を続けている。企業は新卒採用においても“グローバル人材”を意識。世界で活躍できることが、ビジネスパーソンとして成功するための条件となりつつある。

ただし、“グローバル人材”というキーワードが流通する一方で、その中身についてはまだ誤解もある。「英語が話せる人材＝グローバル人材」ではないのだ。図1のグローバル人材育成推進会議による定義をみてみよう。語学力等はあくまで要素の一つに過ぎず、同時にマインド面も重視されていることがわかる。

経済産業省の委託事業として「大学におけるグローバル人材育成のための指標調査」を実施したみずほ情報総研 社会政策コンサルティング部 コンサルタントの田中文隆氏は、これからのグローバル人材に求められる力をこう整理する。

「海外進出の目的や形態は企業ごとに異なり、求められる人材像も一律ではありませんが、基本的な部分で共通する項目が3つあると考えています。一つは、異なる文化的背景をもつ人たちと仕事をするうえで必要となる『異質なものへの関心』。もう一つは、机上の勉強だけでなく、『他人とのかかわりのなかで学

んでいく力』。次に、『語学力やマーケティングなどのテクニカルスキル』です。ただし、語学力が多少弱くても、成長する素養があれば入社後に伸ばせると考えている企業も多いですね」

このような素養・スキルをもち、実際に外国人とのコミュニケーションが必要な仕事に就くグローバル人材のニーズは、今後急速に増えていく(図2)。以前は海外進出というと大手メーカーのイメージが強かったが、今後はサービス業、小売業などの海外展開も活発化。中小企業の進出も拡大していくことが見込まれている。また、職種に関しても、いわゆる国際部門、海外部門だけでなく、経理、人事、広報などさまざまな仕事でグローバル規模の業務が増えていくと田中氏は話す。

進出先も多様だが、中心となるのはやはりアジア。例えば、すでに中国、タイ、マレーシア、フィリピンなどで多店舗展開しているイオンは、カンボジアなどへの出店も強化しているが、今後は、このように新規市場を求めて新興国へ進出する企業はますます増えてくる。企業の人事採用もこのような動きに対応。図3で示したように、海外赴任を前提とした日本人採用を拡充する企

図2 グローバル人材需要量の将来推計値

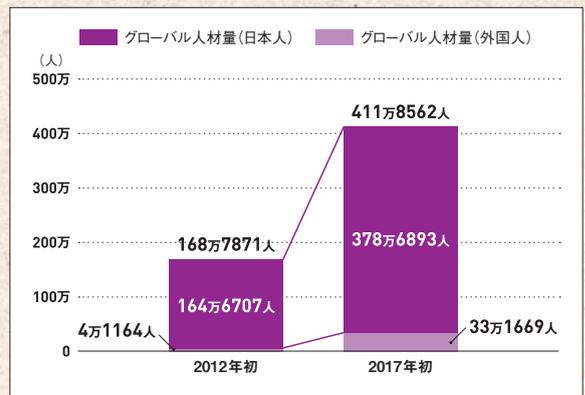


図1 グローバル人材に求められる要素

要素Ⅰ	語学力・コミュニケーション能力
要素Ⅱ	主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
要素Ⅲ	異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

出典：グローバル人材育成推進会議「中間まとめ」2011年6月

出典：経済産業省委託事業 みずほ情報総研「大学におけるグローバル人材育成のための指標調査」2012年3月

業も多い。また、幹部クラスや採用の多国籍化も進行していきため、外国人との競争が当たり前になっていくだろう。

### 企業が大学に求める取り組みは 留学制度の充実や英語による授業など

そこで日本社会全体のテーマとなっているのが、このような新しい環境に対応できる人材をいかに育てるかということ。なかでも大学教育に関しては企業からの要望も大きい。具体的には、**図4**の通り、「海外大学との連携による交換留学やダブルディグリープログラム等の実施」「企業の経営幹部・実務者からグローバル・ビジネスの実態を学ぶカリキュラム」「専門科目を外国語で履修するカリキュラム」「日本文化・歴史を学び、海外から日本・日本人がどう見られているかを考えるカリキュラム」といった取り組みへの期待が高くなっている。

このような社会的ニーズを受けて、大学でもグローバル化に対応した改革が急ピッチで進んでいる。その一例が、国際、国際教養、国際コミュニケーション、国際関係、国際文化などの“国際”系学部・学科の増加だ。秋田県の国際教養大学のように、企業から高い評価を得て、短期間に急成長するケースもあり、現在も毎年のように新設が相次いでいる。

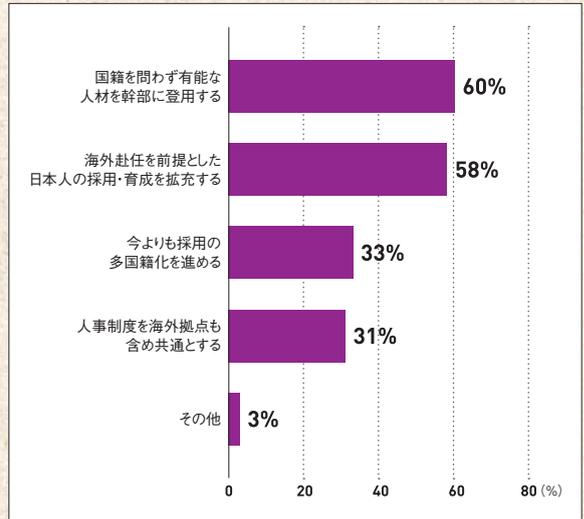
これらの学部・学科には、留学制度の拡充、外国人留学生の積極的な受け入れ、英語による専門教育、コミュニケーション力など実践力重視の教育などに力を入れているところが多く、前出の企業ニーズにマッチしているのが特色だ。そのため、グローバル化を意識した受験生からの人気も年々上昇中。ただし、新しく登場した学部・学科が中心でまだ実績が少なく、名称から教育内容をイメージしにくいケースもあるため、国際系を希望しても、そこから先の絞り込みは意外と悩ましい。

### 「英語を使って何をするか」までを 見据えた学部・学科選択がポイントに

では、高校の進路指導の現場では生徒にどのようにアドバイスをしているのだろうか？ 国際情報科の単位制専門高校で、外国語学部や国際系学部への進学者が多い神奈川県立横浜国際高校の坂本宏明先生に話を聞いた。

「本校は語学教育に力を入れていることもあり、将来は英語を生かした仕事に就きたいと希望する生徒は非常に多いです。そのため、進学先の選択に当たっても、英語、国際といったキーワードに惹かれる傾向があります。ただし、話を聞いてみると、『世界に羽ばたきたい』といった抽象的な将来像しかもっていないケースもあり、具体的な職種についても、翻訳・通訳、外交官、NGO、CA、航空会社、旅行会社といった狭い範囲でのイメージしかもっていない。しかし、実際にはグローバルに活躍できる職種は非常に幅広くなっています。そこをどう意識させるかが学部・学科選びのポイントになります」

**図3** グローバル化に対応するための  
日本企業の人事戦略(複数回答)



**図4** グローバル人材育成に向けて日本企業が  
大学に期待する取り組み(複数回答)

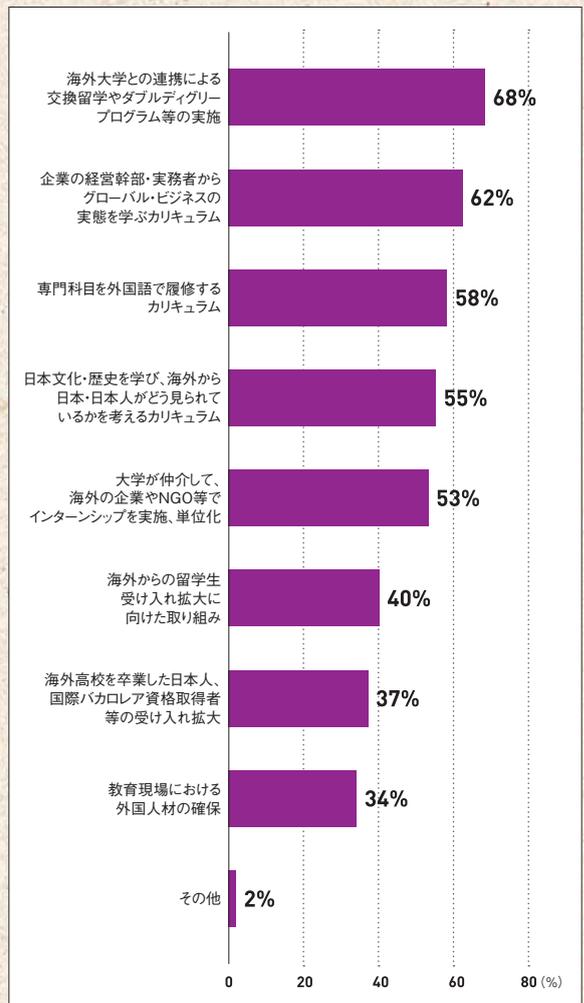


図3、4 出典：財団法人 経済広報センター「企業のグローバル化に対する人材育成に関する意識調査報告書」2012年1月

進路選択に当たって重要なのは、「英語を生かして働く」こと以上に「英語を使って何をするか」ということ。目的から逆算した学部・学科選びが必要なはこの分野には限らないが、グローバル志向のムードが特に強くなっている時期だけに、雰囲気にならされないよう指導することがより重要になる。

### 留学制度の内容や実施時期なども吟味するべき要素の一つ

語学力にすでに自信があるのなら、大学では専門能力の習得に力を入れたほうがベターな場合もある。その意味で、生徒によっては、一般の学部・学科も含めて、視野を広げた進路検討が求められるケースも出てくるだろう。

また、検討ポイントの一つが留学制度。国際系学部・学科では、海外大学との提携による単位互換や両方の大学の学位が得られるダブルディグリーなど、制度面の充実が進んでいる。留学を必須としているところもあり、大きな特色の一つだが、その内容、時期なども吟味するべきだという。

「例えば、年次が進んだ段階での留学だと専門科目は学べませんが、就職活動に影響するリスクがあります。日本の大学教育や就職活動の現状を考えると、どのタイミングでの留学がベストとはいいいくいのですが、少なくとも目的に合致した留学ができるかどうかは検討しておきたいところです。海外大学院への進学を視野に入れているなら、それにつながる留学制度を設けている大学もありますから」(坂本先生)

あるいは早い段階で留学してとにかく語学を鍛えるという考え方もある。4年間の学習プランと合わせて検討したい。

### 人文科学・社会科学の枠を超えた多様な科目を取りそろえた学科も

国際系学部・学科のバリエーションは図5に示したとおり。人文科学・社会科学の枠を超えた幅広い科目を取りそろえた学科もあれば、「国際経営」「国際観光」など専門分野を絞っている学科もある。また、名称が異なっても教育内容は似ている場合もあれば、同じ名称でも特色が大きく異なる場合もあるので、学部・学科名だけで判断するのではなく、それぞれの特色はしっかり調べておきたい。専門分野に関する実力を見るには、教授陣の顔ぶれ、充実度などをチェックするのも有効だ。

また、前出のみずほ情報総研・田中氏が強調する「異文化への関心」「他人とのかかわりのなかで学ぶ力」を養うのであれば、学ぶ環境も見逃せない。留学生との交流は可能か、どの地域からの留学生が多いのかなども確認しておきたい。

4年間、多様性に満ちた環境で異文化との交流を重ねる経験は、“マインド”も大きく変えていく。生徒がグローバル人材として成長するステップとなりうるかどうか——この視点が指導の重要なポイントになってくるはずだ。

図5 主な国際系学部・学科・専攻

学部・学科・専攻名	学べる内容
国際	世界の文化、言語、宗教といった人文科学から国際政治、国際経済などの社会科学までを総合的に学び、国際人としての素養を養う。
国際教養	人文科学、社会科学、自然科学の枠にとらわれない科目を配置し、興味あるテーマを自由に学べるアメリカ型リベラルアーツ教育を行う。
国際文化	国際的な視野から文化を総合的に学ぶ。文学、言語学などの人文科学に限らず、社会学、政治学、情報学なども含んだ学際性が高い学部・学科も多い。
国際関係	国と国との関係に焦点を当てた学問。外交・安全保障や経済関係、さらに開発援助などが研究テーマ。法学、経済学、政治学などを総合した学際的分野。
グローバルスタディーズ／国際地域	世界各国・地域に関する研究をベースに、国際関係、国際紛争、開発援助、多文化共生などの国際社会にまつわるさまざまなテーマに取り組む。
国際政治経済	政治・経済の視点から国際関係について研究する分野。政治学・経済学を軸に、社会学、歴史学、文化学なども採り入れた学際的なアプローチが特色。
国際政治	国家の政策決定や安全保障、国際社会における戦争と平和などを研究する学問。法学部や政治経済学部にも国際政治学が設けられていることも多い。
国際公共政策／国際政策	地球温暖化、貧困、国際紛争、経済のグローバル化など国際社会が抱えるさまざまな問題を学際的な視点から分析し、解決策を研究する学問。
国際経済	国家間で行われる経済活動を研究する分野。貿易、国際金融、国際マクロ経済などが研究テーマ。経済学部に国際経済学が設けられていることも多い。
国際経営／国際ビジネス	経営学教育と英語によるコミュニケーション強化を通してグローバルビジネスで活躍する人材を育成。経営学部に国際経営学科が設けられていることも多い。
国際関係法	国際法、国内法について学び、国家間や国際社会における法的ルールや法的な問題解決について研究。法学部に国際関係法学科が設けられている。
国際情報	国際学と情報学が融合した分野。国際系とIT・情報系にコースが分かれていることも多い。どちらに比重を置いているかも大学によって異なる。
国際社会	国際社会で起るさまざまな現象について考える社会学の一分野。民族、文化、ナショナリズム、ジェンダー、移民問題など採り上げるテーマは幅広い。
国際協力	貧困、環境破壊、人権侵害など世界規模で起きている諸問題に関して、国境を超えてどのような協力が可能かを考える。国際機関やNGOの役割なども学ぶ。
国際観光	国際的な視点から観光について学ぶ分野。海外の観光ビジネスの現場で研修を行う大学も。外国語によるコミュニケーション教育にも力を入れている。
外国語	外国語の運用能力を養う学部。英語、ドイツ語、フランス語、中国語など言語ごとに学科・専攻・コースが分かれている。当該国の文化研究なども行う。
国際コミュニケーション／異文化コミュニケーション	言語や国際社会・文化に関する理解をベースに、コミュニケーションについて考える学問。実践的な外国語コミュニケーション力強化にも力を入れている。
国際言語文化	世界各国の言語、文学、文化について、それぞれの特徴や共通する構造、関連性などを研究。語学の習得にも力を入れている。
比較文化	文学、文化、思想・宗教、生活などの切り口から、複数の国や地域について研究し、文化の多様性を理解する。語学の習得に力を入れている大学も多い。
アジア(その他地域研究系)	アジアを対象として、政治、経済、文化、言語などを研究。語学の習得にも力を入れている大学が多い。そのほか、ヨーロッパを対象とした学科などもある。
国際日本	国際社会に日本文化を発信できる国際人を養成する学部。日本研究を中心に据えつつ、国際教養や英語教育にも力を入れる。明治大学が設置している。